

図と地の解釈学

—意識下に沈む無名存在の探求—

野 林 靖 彦

1. はじめに

【画1】¹は、デンマークの心理学者・E. ルービン (Edgar John Rubin) が考案した多義図形である。壺のように見える黒い部分と、向き合う二人の顔に見える白い部分が、互いに〈図〉と〈地〉の役割を担って入れ替わる、いわゆる「図／地」反転を示すものとして有名である。



【画1】 ルービンの〈図〉／〈地〉反転図形

この図形を見ると、〈図〉と〈地〉の認識が表裏一体の関係にあるということがよく分かる。中央の黒い部分は、それ以外の白い部分（すなわち〈地〉の部分）との関係性において、はじめて「壺」としての〈図〉の意味（価値）を持つことになる。同様に、白い部分は、それ以外の黒い〈地〉の部分との関係性において、はじめて「向き合う顔」としての〈図〉の意味（価値）を持つことになる。

〈図〉と〈地〉の問題は、人間の認識活動全般に見られる現象である。例えば、俳文学者・堀切実は、次のように述べている。

・「われわれが“美しい花”を知覚し得るのは、花そのものについての認識によるだけではなく、器・部屋・光・音楽・人など、周囲の相対的な環境の中における花のイメージの印象があるからである。」

（堀切（2002）p.255）

一般に、我々はある物事を認識する際、背後・周囲に隣接する存在との関係から、その物事の意味を認識していると考えられる。この場合、意識・関心が注がれている当該の認識対象を〈図〉と捉えたと、その背後・周囲にあって〈図〉の有意味性を支えているものは〈地〉的存在ということになる。〈図〉は、〈地〉との関係性において〈図〉としての意味を持つ。当然、〈図〉の解釈には、その背後・周囲に見出される〈地〉の存在を捉えることが必要となる。

しかし〈地〉は、常に〈図〉に対して“影”の存在であり、我々の意識下に潜在化する傾向を持つ。意識下に沈むこの〈地〉的存在を、いかにして浮かび上がらせて捉えればよいのか。こうした問題意識に基づき、「図と地の解釈学」の方法を探ってみようというのが、この論文の趣旨である。

2. 無名の存在

我々の日常には、名のある存在と、無名の存在とがある。記号論では、前者を有標あるいは有徴（marked）、後者を無標あるいは無徴（unmarked）と呼ぶ²。一般に、markedな存在は、人々が関心を持ってまなざしを注いだものであり、人の意識上に顕在化する特徴が備わっている。これに対してunmarkedな存在は、人々の関心が相対的に見て薄いものであり、そのため必然的に、意識下に潜在化しやすい特徴を持つことになる。

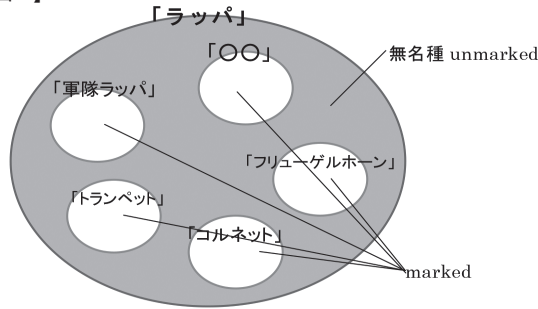
例えば、ラッパという楽器を例に考えてみよう。ラッパにも色々ある。「トランペット」、「ホルネット」、「フリーゲルホーン」、「トロンボーン」、「軍隊ラッパ（進軍ラッパ）」…など、種々のラッパが有徴的に存在する（←【図1】参照）。しかし、こうした有徴のラッパではない、それ以外のただの「ラッパ」（unmarkedなラッパ）と言ったら、どんなものになるだろう。考えつくのは、例えば

¹ 【画1】は http://nooskoryaku.blogspot.jp/2013/06/12_27.html より。これを筆者が加工したものが、後出の【画1-a】及び【画1-b】である。

² marked／unmarkedについて、例えば文化人類学者・山口昌男などは、「有徴／無徴」という用語を用いているのに対し、言語学者たちは好んで「有標／無標」の用語を用いる。本稿では、この2種類の用語法を区別してはいない。

³ <http://www.amazon.co.jp/gp/bestsellers/toys/2189662051> より。

【図 1】



【写真 1】 おもちゃのラッパ

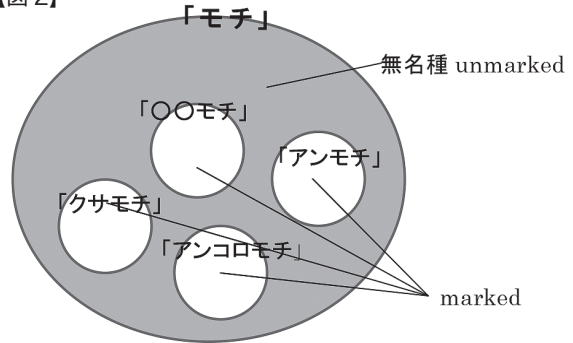
【写真 1】³のような子供の玩具のラッパか。私はこのラッパの名称を知らない（「オモチャのラッパ」とでも呼ぶしかない）のだが、こうした無名の存在を探っていくと、結果的に、人々の関心がきわめて薄い、存在の希薄なものに行き当たることになる。

同様の例として、モチ（餅）を取り上げてみよう。モチにも色々あって、「クサモチ（草餅）」、「アンモチ（餡餅）」、「アンコロモチ（餡ころ餅）」、「マメモチ（豆餅）」、「アベカワモチ（安倍川餅）」…etc. と、挙げればきりが無い（←【図 2】参照）。そうした中、これら様々な「〇〇モチ」ではない、それ以外のただの「モチ」（= unmarked なモチ）といったら、一体どんなものが思い浮かぶだろうか。思いつくのはせいぜい、例えば何の加工もしていないただ搗いただけのモチ（←【写真 2】⁴参照）…、そんな類いのものだろう。こうした無名のモチもやはり、存在が希薄で、明らかに人々の関心があまり注がれることのない、有意味性の低いものである。

このように、我々が関心を注いで捉えようとする有徴的存在の背後には、無名の存在が潜んでいる。無名存在は、有徴存在に比べて人々の関心が相対的に薄く、明らかに有意味性の低いものとなる。記号が引き起こすこうした現象について、文化人類学者・山口昌男は次のように述べている。

- ・「よく悪いことをした人間のことを『あいつはマークされている』といますが、『マークされている』というのは、普通とはちがうと見られていることでもある。簡単にいえば、有徴、無徴の二つに分けら

【図 2】



【写真 2】 無名のモチ

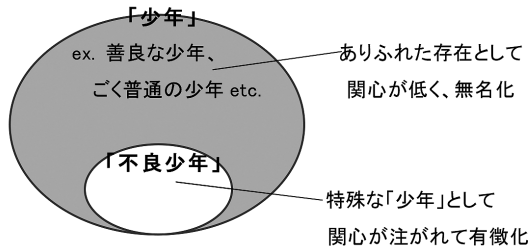
れるわけです。そこら辺にあって当たり前だと思うもの、なんとも思わないものは無徴です。日常生活のありふれた光景を構成しているものは、無徴の記号である。記号であることさえも意識されないような存在です。ところが、同じものでもマークされるものがある。たとえば髪の毛を取り上げてみましょう。流行に合うように刈られている髪の毛は、無徴の記号で済む。ところが、長髪のようにこれをずっと伸ばしてしまうと、ちょっとちがうということで、有徴になるわけです。」（山口（2007）p.48～49）

- ・『「徴を持たない」項というのは、範疇全体か、または、『徴つき』項が他を切り捨てて残ったものとしての部分を示す。両者の違いは『徴なし』の方が意識にのぼらないことである。…略…『不良少年』という表現（徴つき）があっても、『善良少年』という表現はない。』（山口（1975）p.65～66）

山口は、「少年」のなかの「不良少年」が有徴であるのに対し、「善良少年」という表現がないことを例に挙げている。これは、我々の関心が、“特殊な「少年」”という意味で専ら「不良」に注がれ、有徴的に捉えられているということである。一方、そうではない、例えば善良な少年 etc. については、“ありふれた存在”として話者の関心は相対的に低く、そのため無名存在として捉えられているのだと考えられる（←【図 3】参照）⁵。

⁴ <http://www.e-sakaeyanet/> より。

【図 3】



このように、徴の有無（marked/unmarked）は、人の関心の有無と結びついた現象である。有徴（marked）の存在は、話者の関心が注がれた部分であり、その結果、人の意識に上りやすい性質を持つことになる。これに対して、無名存在は、話者の関心の注がれた有徴性のものを取り去って残ったものと言え、相対的に人の関心の低い存在として意識下に沈みやすい傾向を持つことになる。名とはまさに、話者の関心の焦点に産み落とされた徴なのである⁶。

3. 図と地

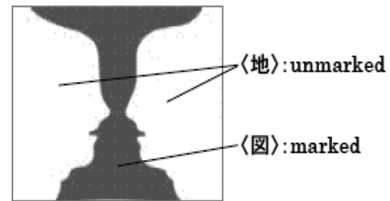
ゲシュタルト心理学では、人の意識の焦点に浮かび上がる対象を〈図〉、その背景にあって意識下に沈む領域を〈地〉と呼ぶ。『岩波哲学・思想事典』の「図／地」の項（長澤邦彦執筆）には、次のような説明が見られる。

- ・「例えば、白紙の上のインクのしみを見る場合、しみは知覚意識の焦点に位置し、背景となる白紙に対して浮き上がって見える。前者を『図』、後者を『地』と呼ぶ。」（p.873）

この場合、「知覚意識の焦点に位置」する〈図〉には「インクのしみ」としての有徴性が備わっている。では〈地〉はどうか。インクのしみが付いた白紙は、もはや「白紙」とは呼ばない気がする。仮に、それでも「しみ付きの『白紙』」と呼ぶのだとすれば、その場合、「しみ」の付いた部分も含めて「白紙」となり、やはり〈地〉は無名だと言うことになる。以下、こうした〈図〉

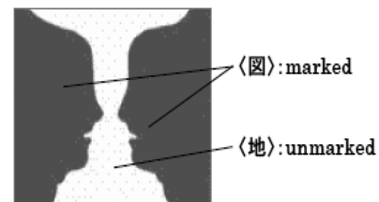
の有徴性、〈地〉の無名性といった特徴について、有名なルービンの図形をもとに確認してみたい。

まずは、ルービンの図形を、「壺」を描いた作品として見るとしよう。その場合、我々は【画 1-a】のように灰色部分を〈図〉、白い部分を〈地〉と捉えることになる。この時、灰色の〈図〉の部分は、「壺」としての有徴的価値を持つことになる。一方、〈地〉の部分はどうか。左右両端の白い部分は「向き合う顔」という意味（価値）を失っており、単なる「壺」の背景として unmarked な性質を帯びたものとなっている。



【画 1-a】 ルービンの「壺」

今度は、同じルービンの図形を「向き合う顔」を描いた作品として見た場合はどうだろう。我々は【画 1-b】のように、中央の白い部分を〈地〉と捉え、その両脇の灰色部分を〈図〉と捉えることになる。この時、灰色の〈図〉の部分は「向き合う顔」としての有徴的価値を帯びることになる。一方、中央の白い〈地〉の部分はもはや「壺」としての価値（意味）を失い、単なる無名の背景として存在することになる。



【画 1-b】 ルービンの「向き合う顔」

このように見てくると、やはり、有徴性の〈図〉に対して、その背景としての〈地〉は無名性をその特徴としていることが分かる。〈図〉と〈地〉の性質について、西田谷（2014）は次のように述べている。

⁵ 山口（1975）は、marked な「不良少年」の背後にある無名存在として「善良な少年」しか捉えていない。しかし、本稿が主張するような、否定性を導入した複合的述語命題形式を用いることで、「不良少年」の背後には「不良ではない少年」として「善良な少年」に加えて、「ごくありふれた普通の少年」も潜在化していることが明らかになる。後者の少年は、「善良な少年」よりもさらに意識下に沈んだ、忘れ去られた無名存在と言える。

⁶ 言語と思考の結びつきを指摘する説は、W. フォン・フンボルトをはじめ、有名なサピア＝ウォーフの「言語相対論」など、昔から多くの主張が見られる。この類いの、特に「ラディカルな言語相対論」の主張には、多くの批判が見られる。ドイッチャー（2010）、今井（2010）等参照。例えば、ある色彩語彙を持たない言語の話者は、その色を認識することができない（概念体系の中にその色彩概念が存在しない）といった類の見解には、近年多くの反証データが示されている。

このことについて言えば、本稿が示したここで示した「無名存在」のようなものを考えれば良い。コトバがなくても確実に存在するものがあるわけで、行き過ぎた言語相対論に問題があることは明らかである。本稿がここで主張するのは、人の関心（志向性 intentionality）と言語（記号、徴）の結びつきであり、無名存在は有徴存在に比べて話者の関心が相対的に低くなり、そのため意識下に潜在化し黙殺されやすい…という事実である。

- ・「顔の側面の図として認識するとき他の壺の側面は地として黙殺され、たとえば壺の面を図として認識するとき、顔の側面は隠される。」(p.81)

〈図〉／〈地〉の問題は、marked／unmarked といった記号論的問題と結びついた現象であると考えられる。有徴性の対象は人の関心が注がれたものであり、そのため〈図〉も意識の焦点に浮かび上がる性質を持つことになる。一方、無名であるということは、相対的に人の関心が低いことを示しており、その結果として〈地〉は意識下に沈み、黙殺されやすい性質を持つことになる⁷。

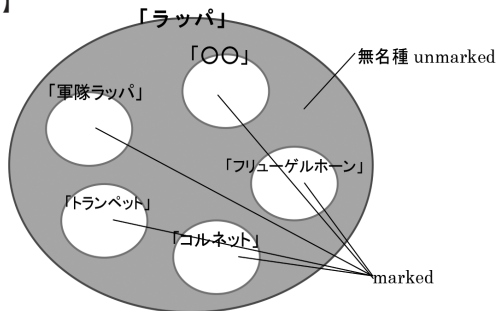
4. 〈地〉に沈む無名存在の表面化

—否定性を導入した複合的述語判断—

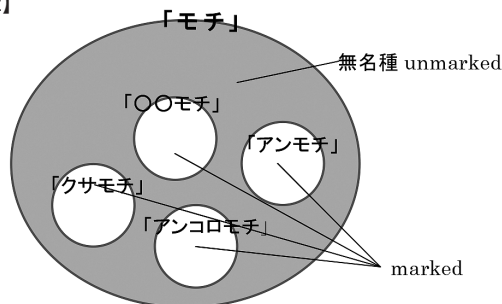
では、その無名性ゆえに意識下に潜在化しやすい特徴を持つ〈地〉的存在を、我々はどうのようにして記号的に捉えることができるのだろうか。

例えば【図1】で、「トランペット」や「ホルネット」といった種々の有徴ラッパの背後に存在する無名の「ラッパ」には、それを特定する名はない。【図2】でも同様である。「アンコロモチ」「クサモチ」など種々の有標の「〇〇モチ」の背景に確かに存在する「モチ」

【図1】



【図2】



「モチ」。これにもやはり名称はない。

これらを捉えるには、『〇〇』ではない『ラッパ』とか、『〇〇モチ』ではない『モチ』のように、否定性を導入した複合的述語判断の形式を用いなければならない。この複合的述語判断は論理記号で表記すると次の(1)(2)のようになる⁸。

(1) 「ラッパ」の〈地〉に沈む無名存在

$$= \neg \text{「〇〇」} \wedge \text{「ラッパ」}$$

(「〇〇」ではない、且つ、「ラッパ」である)

(2) 「モチ」の〈地〉に沈む無名存在

$$= \neg \text{「〇〇モチ」} \wedge \text{「モチ」}$$

(「〇〇モチ」ではない、且つ、「モチ」である)

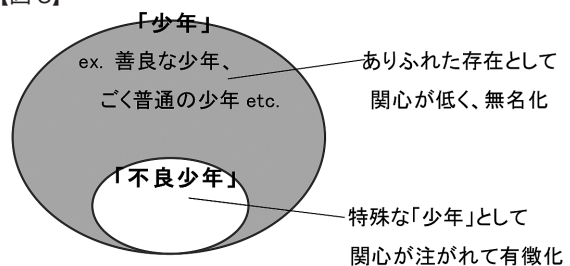
(1) は <ラッパである／～ではない>と<〇〇である／～ではない>、(2) は <モチである／～ではない>と<〇〇モチである／～ではない>という、いずれも否定性を含む2組の述語判断を組み合わせた複合的述語の形式である。〈地〉に沈む無名存在は、こうした形式によってはじめて記号的に捉えられることになる。

山口(1975)が挙げた「不良少年」の例はどうだろう。【図3】で「不良少年」の背後に位置する善良あるいは普通の少年—すなわち無名の「少年」は、『不良』ではない『少年』という(3a)のような形でとらえることができる。

$$(3a) = \neg \text{「不良」} \wedge \text{「少年」}$$

(「不良」ではない、且つ、「少年」である)

【図3】



ところで、(3a) は、<少年である／～ではない>と<不良である／～ではない>という二つの述語判断を組み合わせた形式であるが、よく考えてみると、この組み合わせでとらえられる「不良少年」の背後の存在は、

⁷ 無名存在も、人々の関心が注がれるようになると有徴化することがある。例えば、「女子サッカー」は、「特殊なサッカー」として有徴であるのに対し、男子のサッカーは「当たり前」の「サッカー」として無名的に捉えられるのが一般的である。しかし、近年、テレビ中継で「男子サッカー」というタイトルを見る機会があった。これは、有徴な「女子サッカー」の普及・一般化に伴い、当たり前のものであり、特に意識する必要のなかった「無名のサッカー」に「女子サッカー」と区別する意識・関心が発生し、有徴化したのだと考えられる。

⁸ \neg は「～ではない」という否定記号。 \wedge は「且つ (and)」の意味を表す連言記号である。以下、論理式はすべてこの記号を用いて表記している。

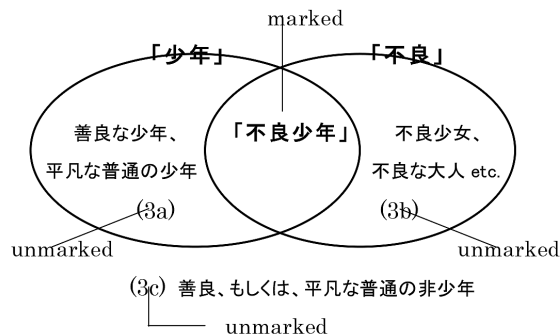
他にもある。例えば、(3b) の「『少年』ではない『不良』」や、(3c) の「『不良』ではない非『少年』」も、有徴な〈図〉的存在である「不良少年」の背後 (= 〈地〉) に沈む無名存在である。

(3b) = 「不良」 \wedge \neg 「少年」
 (「不良」である、且つ、「少年」ではない)
 ex. 少女の不良、大人の不良 etc.

(3c) = \neg 「不良」 \wedge \neg 「少年」
 (「不良」ではない、且つ、「少年」でもない)
 ex. 善良、もしくは、ごく普通の非少年

これを図示すれば、【図 4】のようになる。このように、「不良少年」の背後には複数の無名性存在が潜在化していることが分かる。

【図 4】

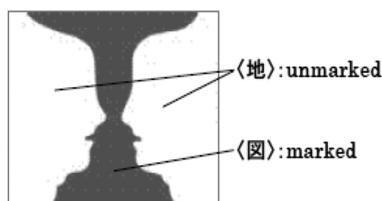


5. ルービンの図形の〈地〉に沈むもの

この方法を“ルービンの図形”に適用してみると、どのような無名存在を〈地〉から浮かび上がらせることができるだろうか。

まずは、この図形を【画 1-a】のような「壺」を描いた作品と見た場合、〈地〉の存在を(4a)のように捉えることができる。

(4a) = 「画 1-a」 \wedge \neg 「壺」
 (「画 1-a」である、且つ、「壺」ではない)

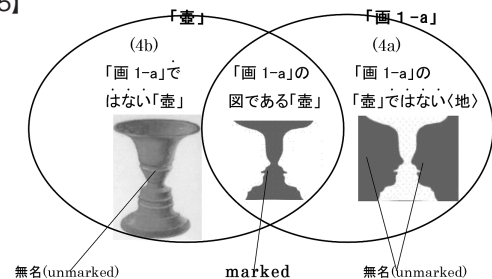


【画 1-a】 ルービンの「壺」

(4a) は一般的に考えられているノーマルな〈地〉の存在であるが、この無名存在(4a)は「【画 1-a】の『壺』ではない部分」として捉えられている。つまり、〈画 1-a である／～ではない〉と〈壺である／～ではない〉という、否定性を含んだ 2 組の述語判断の複合によって捉えられている。とすれば、この複合的述語判断がとらえることのできる無名存在が他にももう一つ、例えば(4b)のような、ルービンの図形の“外”に存在する「壺」というものが存在するはずである。図示すれば、【図 5】⁹のようになる。

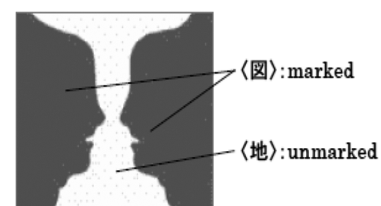
(4b) = \neg 「画 1-a」 \wedge 「壺」
 (「画 1-a」ではない、且つ、「壺」である)
 ex. 現物の壺や他の絵の中の壺 etc.

【図 5】



同様に、ルービンの反転図形を「向き合う顔」の画と見る【画 1-b】の場合も、〈図〉である「向き合う顔」の背後にある無名性の〈地〉的存在として、まずは(5a)のようなものが捉えられる。

(5a) = 「画 1-b」 \wedge \neg 「向き合う顔」
 (「画 1-b」である、且つ、「向き合う顔」ではない)



【画 1-b】 ルービンの「向き合う顔」

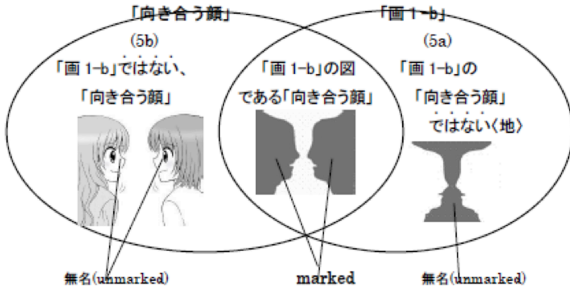
この、〈地〉に潜む無名存在も、〈画 1-b である／～ではない〉と〈向き合う顔である／～ではない〉という、否定性を含む二つの述語判断の組み合わせによって捉えられている。とすれば、この複合的述語判断がとらえることのできる無名存在が、やはり他にももう一つ、(5b)のようなもの—すなわち、ルービンの図形の外に存在する「向き合う顔」といったものが浮かび上がってくる。

⁹ 【図 5】(4b) の壺の写真は、フリー百科辞書ウィキペディアの「ルービンの壺」の項より。

(5b) = \neg 「画 1-b」 \wedge 「向き合う顔」
(「画 1-b」ではない、且つ「向き合う顔」である)

これを図示すれば【図 6】¹⁰ のようになる。【画 1-b】の〈図〉の背後には、白い部分の他に、この画の外にも無名存在が潜んでいるということが分かる。

【図 6】



このように考えてみると、ルービンの図形をもとに心理学等でなされる〈図〉と〈地〉の一般的説明(「黒地部分 = 〈図〉 / 白地部分 = 〈地〉」といった説明)は、この図形(作品)に閉じ込められた見方に過ぎなかったことが分かってくる。我々がこれまで慣れ親しんできた「図/地」論は、「ルービンの図形」というものを前提にして語られた、既成化された“小「図/地」論”であり、その“外”に広がる本来の〈図〉と〈地〉の問題の中の一部(いわば“〈図〉としての「図/地」論”)に過ぎなかったということだ。

6. 井伏鱒二『山椒魚』を例に

以上、〈図〉の背後に広がる〈地〉には、複数の無名存在が潜在化している。こうした存在は、否定性を含む複合的述語判断の形式によって、我々の意識上に浮かび上がらせることができる¹¹。〈図〉の背後に可能性として潜むこうした〈地〉の存在を捉えることは、解釈学の新たな展開をひらくことになる。特に、〈図〉／〈地〉の問題は、言語作品とその背後にあるコンテキストとの関係に当てはめてみる事ができる。作品の背後に広がる〈地〉の連関を浮かび上がらせる作業は、〈図〉としての文(有標的に示されたテキスト)の解釈にとって有効な根拠を示すことになるだろう。以下、井伏鱒二の『山椒魚』¹²を採り上げて、簡単な分析の一例を示してみたい。

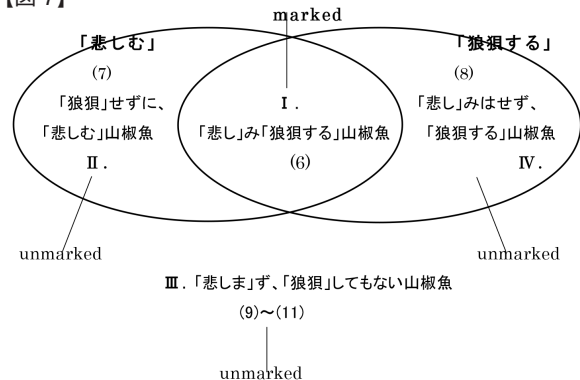
『山椒魚』は、井伏鱒二が最初に発表した彼の代表作である。成長しすぎて棲家である岩屋から出られなく

なった主人公・山椒魚の姿が巧みに描かれている。この物語は、冒頭、「山椒魚は悲しんだ」という一文で始まる。しかし、「悲しんだ」と言っても、それがどういう悲しみなのかは分からない。絶望的な悲しみもあれば、我を忘れて慌てふためくような悲しみもある。シクシク泣くような悲しみもあるだろう。山椒魚の悲しみは、いったいどういう悲しみなのか。テキストの冒頭を見ると、次のように描かれている。

(6) 山椒魚は悲しんだ。彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである。今はもはや、彼にとっては永遠の棲家である岩屋は、出入り口のところがそんなに狭かった。そして、ほの暗かった。しいて出て行こうとところみると、彼の頭は出入り口をふさぐコロッポの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼のからだが発育した証拠にこそはなったが、彼を狼狽させかつ悲しませるには十分であったのだ。(p.1)

つまり、この冒頭の山椒魚の心理状態は、「悲しみ」且つ「狼狽」した状態(「悲しむ」 \wedge 「狼狽する」)であることが、テキスト上に有標的(marked)に描かれていることが分かる。しかし、その一方で、この有標的な山椒魚の様子背景にある、可能性としての山椒魚の心理的な在り方というものを、〈悲しんでいる／～ではない〉、〈狼狽している／～ではない〉という肯否二系にわたる2組の述語判断を組み合わせて、次の【図 7】及び【図 8】に示すようなⅠ～Ⅳの連関として捉えることができる。

【図 7】

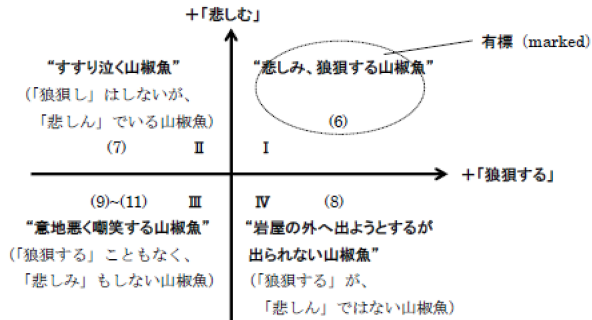


¹⁰ 【図 6】(5b) のイラストは <http://blog.english.vc/?eid=88> より。

¹¹ 語を「話者の関心の焦点に置かれた標識」と捉えること、「否定性の導入」、「複合的判断」…といった本稿が主張する方法論は、野林正路(1986)等で提唱されている「構成意味論」の考え方に基づくもの。この考え方のテキスト分析への応用例としては、野林靖彦・野林正路(2003)、野林靖彦(2004)、同(2005)、同(2007)等参照。

¹² テキストは、井伏鱒二『山椒魚』新潮文庫(昭和23年発行107刷)を使用。

【図 8】



I～IV（←【図7】及び【図8】参照）の山椒魚の心理状態のうち、Iの状態は、テキスト冒頭に(6)下線部のように有標的に表現されているが、他のII～IVの状態はテキスト上、少なくとも「悲しんでいる／いない」、「狼狽する／しない」という表現で明示的には書かれていない。しかし、これらはいずれも、可能性としてあり得る山椒魚の心理状態である。実際、テキストを丹念に読んでいくと、それぞれ当てはまる山椒魚の描写を見つけることができる。

例えば、IIの「悲しむが、狼狽してはいない」状態の山椒魚は、次の(7)のような場面に見出すことができる。

- (7)「ああ寒いほどひとりぼっちだ！」注意深い心の持ち主であるならば、山椒魚のすすり泣きの声が岩屋の外にもれているのを聞きのがしはしなかったであろう。(p.12)

(7)に描かれているのは“すすり泣く山椒魚”であり、決して慌てふためき狼狽するような様子ではない。ここには「悲しむ」や「狼狽する」といった明示的表現は一切見られない。しかし、IIの「悲しんでいるが、狼狽してはいない」の状態が無標的(unmarked)に描かれていると見ることができるだろう。

他に、例えば(8)のような場面には、IVの「悲しみはせず、ただ狼狽する」山椒魚の状態を見出すことができる。

- (8)彼は前身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこにきびしくコロップの栓をつめる結果に終わってしまった。それゆえ、コロップを抜くためには、彼は再び前身の力を込めて、うしろに身をひかなければならなかったのである。(p.10)

ここに描かれているのは、どうしても岩谷の外に出ようと決意してチャレンジするが、出ることができない…といった山椒魚の様子である。テキスト上には一切、「悲しむ」とも「狼狽する」とも書かれていない。しかし、外に何とか出ようとしたが、うまくいかずに、にっちもさっちもいなくなつて慌てふためき山椒魚の“動的”な様子が描かれていると見るができる。

同様に、IIIの「悲しまず、狼狽してもいない」状態も、テキスト上には明示的に書かれてはいない。しかし、次の(9)～(11)のような場面は、こうした心理状態の山椒魚を無標的(unmarked)に描いていると見るができる。いずれも、山椒魚の屈折した意地悪さが描かれており、悲しんでいるわけでも、慌てふためき狼狽しているわけでもない山椒魚の様子が読み取れる。

- (9) 山椒魚はこれらの小魚たちをながめながら、彼らを嘲笑してしまった。「なんと不自由千万なやつらであろう！」(p.8)
- (10) (小エビを馬鹿にして…) 山椒魚は得意げに言った。「くったくしたり物思いにふけったりするやつは、ばかだよ。」彼はどうしても岩屋の外にでなくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでいるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。(p.9)
- (11) 山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。そしてある日のこと、岩屋の窓から紛れ込んだ一匹の蛙を外に出ることができないようにした。…略… 山椒魚は相手の動物を、自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であった。(p.12)

以上のように、この小説の冒頭(= (6))に有標的に描かれた『「悲しみ」且つ「狼狽する」』山椒魚(= I)の背後には、可能性としてのあり得る山椒魚の心理状態が連関的に存在していることが分かる。有標事態の背後にある、I、III、IVの状態はいずれも無標的(unmarked)に描かれており、これを捉えるには読み手の解釈学的作業を経なければならない。その際、少なくとも、＜悲しんでいる／～ではない＞と＜狼狽する／～ではない＞という肯否二系にわたる2組の述語判断の組み合わせでテキストを分析することで、I～IVのような山椒魚の心理状態の連関を捉えることが可能となる¹³。

¹³ 言語学者・グレマスは、A / Bの二項対立に - A / - Bを組み合わせた「記号論的四角形」という図式を提案。これを物語分析に用いることで、テキストには明示的に現れていない辞項まで予測・発見できると指摘する。グレマス (1966)「訳者あとがき」p.361参照。例えば西田谷 (2014) は、芥川龍之介の『羅生門』を例に取り上げて、グレマスの考え方を次のように説明しており、大変興味深い。

・『羅生門』では、下人は盗人(A)と死(B)の二つの選択肢に直面するが、盗人にならない(-A)か死さない(-B)という二つの否定項を設定すれば、死なない道として消費都市を離れて農民等の生産者として生きていく道や、また盗人として死ぬ道もありうるということが想定できる。(p.30)

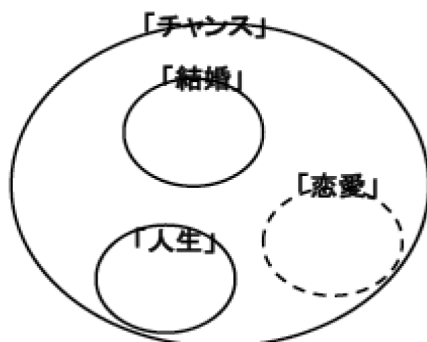
山椒魚の心理状態は、テキスト上に明示的に書かれたことだけでは明らかにはならない。明示的に書かれたことと、その背後にある無標的な事態との関係性を捉えてこそ、はじめて山椒魚の悲しみの実体 (reality) は見えてくると考えられる。

7. 否定性表現の意味論的作用—蕪村の句を例に—

以上、〈地〉に沈む unmarked な存在を捉えることのできる形式には、「～ではない」という否定性の述語判断が含まれることになる。つまり否定には、意識下に沈むモノゴトを顕在化させる働きが備わっていると考えられるのだが、なぜこうした機能を否定は持つのだろうか。次の文を見てほしい。

- (12) ①人生はチャンスだ。②結婚もチャンスだ。③恋愛もチャンスだ。と、したり顔して教える苦勞人が多いけれども、私は、そうでないと思う。私は別段、例の唯物論的弁証法に媚びるわけではないが、少なくとも恋愛は、チャンスでないと思う。私はそれを、意志だと思う。(太宰治『チャンス』)

(12) の下線①～③がいずれも肯定述語の表現であるのに対して、二重下線部「恋愛はチャンスでない」は否定述語の表現となっている。肯定表現はいずれも限定性を帯びた表現である。下線①～③はいずれも【図9】のように、「チャンス」であるものの中に「人生」「結婚」「恋愛」が位置づけられていることを表している。これに対し、否定表現は非限定性の表現である。(12) の二重下線部は、「『恋愛』が『チャンス』の下位類に位置づけられる」という判断を打ち消しているに過ぎず、「では何の下に位置づけられるのか？」ということが限定的には何も表現されていない。そのため否定表現の後には、波線部のような肯定述語による限定表現が付け加えられることが必要となる。



【図9】

このような特徴を持つ否定述語の表現領域は、結果的に非限定的で無限の層を帯びたものとなる。否定性述語判断が〈地〉の解釈に機能するのも、こうしたことと結

びついた現象だと考えられる。すなわち、括られた枠の外に出て、“可能性としての領野”を切り拓いていく機能というものが否定性述語判断には備わっているということではないか。

堀切 (2002) は、否定性表現には「表現以前の表現にアプローチするのに有効」(p.250) な性質が備わっており、この性質が俳句において有効性を発揮すると述べている。とりわけ「蕪村の句には、広い意味での否定的構造をとった表現法が特徴的である」(p.239～240) とし、次のような句を紹介している。

- (13) 寒月や門なき寺の天高し (句稿屏風)
 (14) 落合ふて音なくなる清水哉 (句稿屏風)
 (15) 花に舞ハで帰るさにくし白拍子 (句稿屏風)
 (16) さみだれに見えずなりぬる径哉 (新花摘)

関心の焦点に捉えられた事態は、肯定性の表現形式で表現されるのが普通であると言えよう (例えば、「門なき」のかわりに「朽ちた」とか、「音なくなる」のかわりに「静になる」などのように)。しかし、蕪村はこれを否定性表現で捉えることによって、〈図〉と〈地〉(有標事態と無標事態)を反転させ、両者の連関を意識上に浮かび上がらせる。これはちょうど、「ルービンの壺」を見た我々が、〈図〉と〈地〉の反転を目の当たりにして、目がチカチカするのと同じような体験である。

実際、例えば (13) の「門なき寺」という否定性表現は、同時に、門があったかつての様子を意識上に浮かび上がらせる効果を発揮している。(14) の「音なくなる清水」という表現も「岩清水のせせらぎの音をかすかによみがえらせて、巧妙である」し、(15) の「花に舞ハで」という表現は「白拍子が舞った時のポジティブな姿を、ネガティブな形において想像させる」(以上、堀切 (2002) p.265)。(16) の「見えずなりぬる径」も、径が見えるイメージを意識上に浮かび上がらせる表現効果を発揮していると言える。

蕪村の否定性表現は、こうした直接的なものだけではない。(17) (18) のような、実質的な否定性表現も含めて、当該事態とその背後に浮かぶ想定事態の連関をイメージさせるような句がたくさん見られる。

- (17) 山暮れて紅葉の朱を奪ひけり (真蹟句扇面)
 (18) 鶯の声遠き 日も暮れにけり (蕪村句集)

(17) では、夕暮れの色に染まっていく様子を有標的に表現しながらも、同時に、それに取り込まれていく「紅葉の朱」の色が明らかに意識上に浮かび上がってくるし、(18) でも、鶯の声が聞こえてくるイメージが、「鶯の声遠き」という表現によって逆に浮かび上がってくる。これは、「朱を奪い」や「声遠き」といった実質

的否定性を帯びた表現の効果であると考えられる。

国語学者・塚原鉄雄は、否定表現の特徴を肯定表現と対比させて、次のように述べている。

・「さて、形式的に観察すれば、否定表現と肯定表現とは、対極に位置する矛盾概念であろう。だが、肯定表現が、現実にも架空にも存在する事物を対象として成立するのに相対して、否定表現は、現実にも架空にも存在しない事物を対象として成立する。」(塚原 (1990) p.5)

ここで取り上げた蕪村の俳句はどれも、((17) (18) のような直接的ではない、実質的なものも含めて) 否定性表現を用いることによって、現実の不在事態 (或るものが存在しない事態) を眼前描写すると同時に、その背後に架空の存在事態 (或るものが存在した場合の想定事態) を浮かび上がらせていると言える。単に〈図〉のみを表現するのではなく、その背後の〈地〉に沈み黙殺されている事態までも表面化させ、その両事態をセットで提示する技法として、蕪村の否定表現を見ることができるのではないか¹⁴。

8. 「図と地の解釈学」の実践例

ー 20 世紀モダン・アートからー

否定の機能を利用した創作の例は、蕪村以外にも、例えば 20 世紀前半のいわゆるモダン・アートの世界に集中的に見られる。



【画2】 ルネ・マグリット『これはパイプではない』

【画2】¹⁵ は、ルネ・マグリット (René François Ghislain Magritte 1898-1967) の作品である。パイプの絵が描かれた下の方にはフランス語で「これはパイプではない」と書かれている。マグリットは、「～ではない」という否定の言語表現を作品中に持ち込むことで、【画2】の〈図〉である『(絵としての) パイプ』の背後に隠れている【画2】

ではない本当の『パイプ』の存在を浮かび上がらせ、両者を連関的に見る者に突き付ける。その結果、これを見た我々は、〈図〉としての「絵 (絵画)」というものの意味 (価値) を考えさせられることになる。

【写真3】¹⁶ は、マルセル・デュシャン (Marcel Duchamp 1887-1968) の『泉』という作品である。ただの既製品の小便器に R.Mutt という署名しただけのものだが、この作品を展覧会に出品することでデュシャンはある種のパフォーマンスを行ったと言える。それは、芸術作品らしくないものを「芸術である」と提示することで、その背後にある「芸術らしい芸術作品」や、「芸術的ではない芸術作品」、さらには「芸術的でない、非芸術作品」などの存在を連関的に浮かび上がらせ、我々に「芸術とは何か (芸術らしさとは何なのか)」という問題を突き付けているのである。



【写真3】 マルセル・デュシャン『泉』

こうした試みは、美術の世界だけではない。アメリカの作曲家・J. ケージ (John Milton Cage 1912-1992) の代表作『4分33秒』(1952年) という作品は、演奏者が舞台上で4分33秒間座ったまま何もしないというものである (←右写真¹⁷参照)。これも、楽器の演奏音がないという否定的状況を眼前に提示することで、「楽器音である音」と「楽器音でない沈黙の音」、あるいは「楽器音でない環境音」(ex. 聴衆の咳や、ざわめき etc.) などの連関を浮かび上がらせ、我々に突き付けていると見ることができる。

このように、マグリットやデュシャン、J. ケージらの試みにはいずれも、〈～ではない〉という否定性判断を用いることで、意識下に沈む事態を意識上に浮かび上がらせ、可能性としての“あり得る存在形態”の連関を我々に突き付けるという共通の手法が見られる。この手法こそ、まさ

¹⁴ 堀切 (2002) は「蕪村の詩の発想法に、こうしたかたちで否定表現がしばしば用いられるのは、蕪村の詩の世界の広がり、あるいはまた、その現実離脱の精神に発する想像力の大きさに由来するものなのであろう」(p.250) と述べている。蕪村の作品は、当該の事態だけでなく、その背後にある可能性としての事態も含む連関図式ごと、読者に表現し伝えようとしているかのようである。この「連関図式ごと読者に提示」する表現スタイルは、蕪村が画家でもあったことの影響かもしれないが、どうか。

¹⁵ <http://artprogramkt.blog91.fc2.com/blog-entry-19.html> より。

¹⁶ http://hiphopflava.net/article_explain_kobayashi-daigo_03.php より。

に本稿がこれまで述べてきた「図と地の解釈学」の方法である。



J. ゲージ『4分33秒』の楽譜

9. おわりに

以上、この論文では、有徴 (marked) な〈図〉に対し、〈地〉の無名的 (unmarked) 性質を指摘し、〈地〉の意識下に潜在化する性質は徴の有無 (marked / unmarked) という記号論的現象と結びついた現象であることを述べた。その上で、〈～ではない〉という否定述語を導入した複合的述語判断の形式によって、〈地〉に沈む無名存在を浮かび上がらせ、〈図〉と〈地〉の連関を捉えることが可能だということを示した。

我々はよく「〈地〉のままではいい」などと言う。また「思わず〈地〉が出た」とか、「〈地〉を隠す」といった表現もよく使われる。こうした日常表現には、〈地〉というものの特徴がよく表れている。〈地〉は、何かのきっかけにヒョイとあらわれてきたりするものであって、普通は意識下に潜在化する。そのため、意図的に浮かび上がらせることをしないと表面化しない。しかし、そこにこそ本当のことや大切なものが隠されているのである。

サンテグジュペリの『星の王子さま』に、次のような

セリフがある。

- ・「星があんなに美しいのも、目に見えない花がひとつあるからなんだ …略… 砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだよ」(p.105)
- ・「家でも星でも砂漠でも、その美しいところは見えないのさ」(p.105)
- ・「心で見なくちゃ、ものごとは見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」(p.99)

〈地〉とはまさにそのようなものだと思う。この「見えない部分」を記号化して捉えようという試みが、本稿の言う「図と地の解釈学」である¹⁸。

【参考文献】

- ・今井むつみ (2010) 『ことばと思考』 岩波新書
- ・大橋克洋 (2010) 「無標、有標の言語学」『ポリグロシア』19
- ・橋高眞一郎 (2011) 「図地反転による文学性の考察」『英文学論集』18
- ・新富英雄 (1997) 「アイロニーとコンテクスト」『東洋英和女学院大学短期大学部英米文学研究』17
- ・塚原鉄雄 (1990) 「否定表現雑感」『日本語学』9巻12号、明治書院
- ・中村雄二郎 (2001) 『中村雄二郎著作集Ⅶ 述語的世界と制度』 岩波書店
- ・西田幾多郎 (1917) 「種々の世界」『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』 岩波文庫 1987年
- ・西田幾多郎 (1926) 「場所」『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』 岩波文庫 1987年
- ・西田谷洋 (2014) 『学びのエクササイズ 文学理論』 ひつじ書房
- ・野林正路 (1986) 『意味をつむぐ人びと—構成意味論・語彙論の方法』 海鳴社
- ・野林正路 (2014) 『詩・川柳・俳句のテキスト分析』 和泉書院
- ・野林靖彦・野林正路 (2003) 「解釈学の方法としての語彙論—森鷗外『木精』を例に」『麗澤大学紀要』77
- ・野林靖彦 (2004) 「項と叙述の表現図式—主述構造と

¹⁷ 楽譜写真は http://homepage1.nifty.com/iberia/score_gallery_cage1.htm より。五線譜ではなく文字で、「第一楽章 休み」「第二楽章 休み」「第三楽章 休み」と書かれている。

¹⁸ 新富英雄 (1997)p.125～126 の以下の記述を参照。

・「いま言えることはサンテグジュペリが『星の王子さま』に置いた言葉。『心で見なくちゃ…』『そうだよ。家でも星でも砂漠でも、その美しいところは、目に見えないものさ。』この見えない部分を認識し記号化することが次の課題であろうが認識の世界は奥深い。」

- モダリティ」『国文学』6月号, 学燈社
- ・野林靖彦 (2005) 「意味論の基本図式としての文－堤中納言物語『このついで』の多層的世界の解釈学」『麗澤大学紀要』81
 - ・野林靖彦 (2007) 「文のコンテクスト－ paradigm に拓かれた意味的基盤－」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
 - ・堀切 実 (2002) 『表現としての俳諧 芭蕉・蕪村』岩波現代文庫
 - ・本多 啓 (2004) 「認知意味論における概念化の主体の位置づけについて」『日本認知言語学会論文集』第4巻
 - ・丸山圭三郎編 (1985) 『ソシユール小事典』大修館書店
 - ・山岡俊比古 (1996) 「言語の有標性と言語習得」『言語表現研究』12
 - ・山口昌男 (1975) 『文化と両義性』岩波現代文庫 2000 年
 - ・山口昌男 (2007) 『いじめの記号論』岩波現代文庫
 - ・グレマス ,A.J. (1966) 『構造的意味論 方法の探求』田島宏／鳥居正文訳、紀伊国屋書店 1988 年
 - ・グレマス ,A.J. (1970) 『意味について』赤羽研三訳、水声社 1992 年
 - ・ドイッチャー ,G. (2010) 『言語が違えば世界も違って見えるわけ』椋田直子訳、インターシフト
 - ・フーコー ,M. (1973) 『これはパイプではない』豊崎光一／清水正訳、哲学書房 1986 年

